

法政におけるフランス年 2004 / 05  
古市公威生誕150年記念

# 古市公威とその世界

2004年11月25日(木)～12月8日(水)

ボアソナード・タワー26階スカイホール前



法政大学  
大学史資料委員会  
土木学会

今年、法政大学は 1903(明治 36)年の専門学校令により「財団法人和仏法律学校法政大学」と名乗ってから 101 年目にあたり、新しい世紀を迎える。また、来年はボアソナード博士の生誕 180 周年でもあるので、これを一つの節目に 2004 年 4 月から 2005 年 3 月までの一年間を「法政におけるフランス年 2004 / 05」として、本学とフランスの関係を振り返り、さまざまな企画によって、その絆をさらに深めようということになった。

すでに、入学式(4 / 3)にベルナール・ド・モンフェラン駐日フランス大使をお招きして祝辞をいただき、さらに「責任ある多国主義のためのフランスの外交政策」と題する講演(4 / 22)も行われた。連続講演「フランス印象派 私のこの一枚」が全 5 回シリーズ(5 / 17 ~ 6 / 22)で開かれ、シンポジウム「探偵小説の考古学から今日の探偵小説家へ - 日本とフランスの眼差しの交差」も開催(6 / 13)された。そして、総長はフランス・リヨン第三大学の 30 周年記念式典(6 / 18 ~ 19)に出席、さらに総長は、アンティ - ヴでのボアソナード博士の墓前祭(6 / 20)に参加した。このほか、比較経済研究所による公開講演会「ヨーロッパ人には羨ましい失われた 10 年」が開催(6 / 15)された。

他方、法政大学のもう一つの源流である東京仏学校の初代校長(心得)古市公威は土木学会初代会長でもあった。そこで土木学会は古市公威生誕 150 年記念パネル展「古市公威とその世界」を企画していた。

このたび、工学部の西谷隆亘教授の仲立ちで土木学会の協力により、法政大学と土木学会のジョイント企画「法政におけるフランス年 2004 / 05 古市公威とその世界」のパネル展示を開催するはこびとなった。

また、法政大学史資料委員会では、この「フランス年」の企画として、雑誌『法政』の「法政大学の歴史」シリーズに仏学会・仏学校関係の記事を掲載し、現在は仏学会・仏学校関係資料を収めた『法政大学史資料集』第 26 集を鋭意編纂中である。

2004 年 11 月 25 日

大学史資料委員会  
議長 飯田 泰三

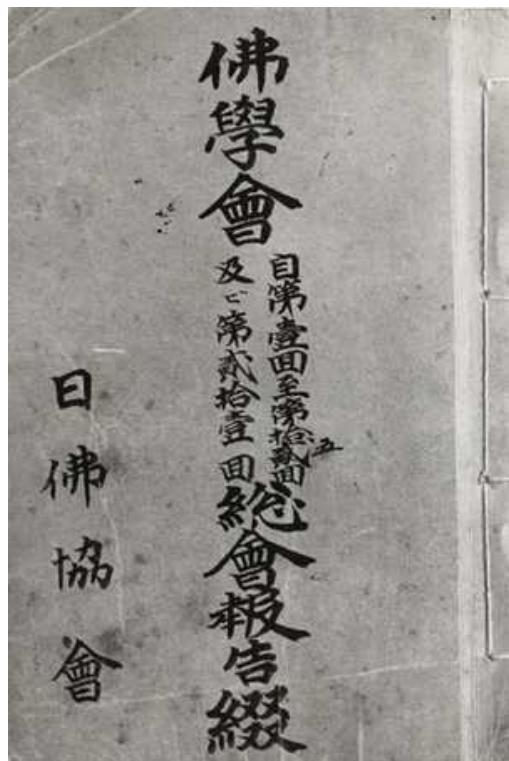
# 仏学会の創立 主唱者七人の一人となる



1886(明治19)年5月22日、仏学会(La Societe de Langue Francaise)が設立され、会長に辻新次、理事員に古市公威、長田 太郎、引田利章、岸本辰雄、土屋政朝、田中弘義、寺尾寿が選ばれた。

仏学会の設立は、その前の4月、辻、古市、長田、山崎直胤、平山成信、寺内正毅、栗塚省吾の7名が参集して「仏朗西学ヲ修ムル者ニ便利ヲ与フルノ旨趣ヲ以テ、一ノ完全ナル仏学校ヲ府下ニ設立センコトヲ計画」したことに始まる。

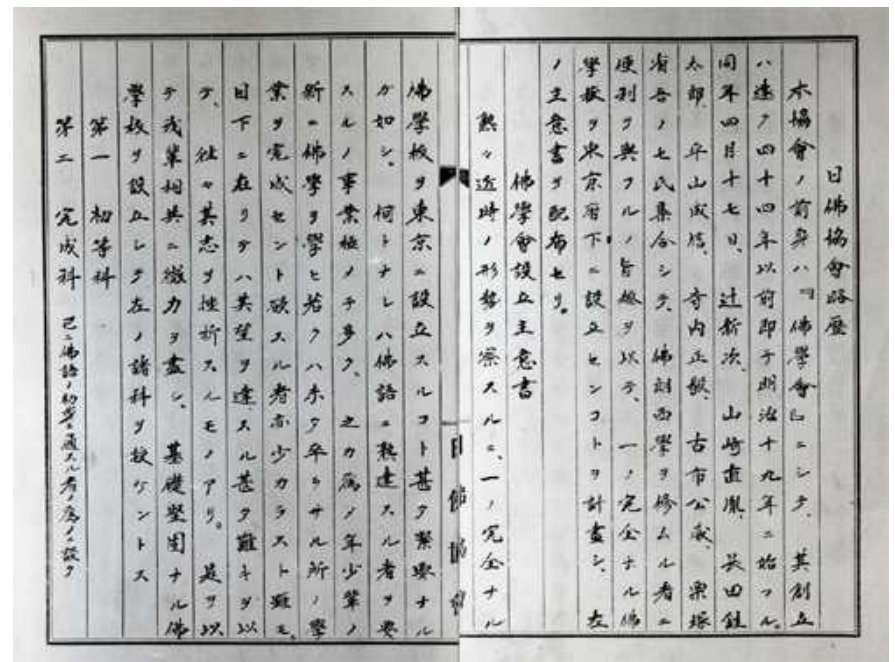
彼らフランス学を修めた、いわば各界の実力派官僚たちが、この時こそ「仏学校」設立呼びかけに立ち上がったのは、その前年に設立された私立「東京英語学校」が急速な発展をみせていたことに刺激された一面がある。同校は杉浦重剛らが、旧明治義塾の跡に英吉利法律学校と校舎を共用し、校長も英吉利法律学校と同じ増島六一郎を擁して創ったものである。他方、すでに1883(明治16)年10月「独逸学協会学校」が井上毅ら政府の司法官僚の手厚い保護の下に発足していた。それらに対抗して仏学校を創る必要が痛感されたのである。



仏学会総会報告綴  
(第1回総会は明治20年11月19日)



仏革命100年記念パリ万博(1889年)に  
展示された「仏学会並東京仏学校概覽」



仏学会設立主意書



仏学会初代会長  
辻新次  
(1842-1915)

辻新次  
1842年(天保13)年、信州松本藩士の子として生まれ、蕃書調所でフランス語やオランダ語を修め、維新後、大学南校校長、文部書記官、地方学務局長などを歴任、学校教育制度の基本となる諸施策の策定に関与した。1886(明治19)年文部次官の時、仏学会の設立に主導的な役割を果たし、仏学の学術発展に寄与。1889(明治22)年の和仏法律学校設立時には理事員、その後も維持員を務めた。のち帝国教育会会長、貴族院勅撰議員となった。1915(大正4)年死去。



ポアソナード  
(1825-1910)

ポアソナード  
1825年、フランス・ヴァンセンヌ市に生まれる。1873(明治6)年法典編纂を企画していた日本に、鮫島尚信駐仏公使の懇請により来日。司法省法学校で教授する傍ら、行政裁判所・外務省・内務省などの顧問となり、種々の献策や法典編纂の大事業に尽力した。また、東京仏学校・東京法学校・明治法律学校でフランス法の講義を行い、ことに創立まもない本学の育成に情熱を燃やし、その基礎固めに精魂を傾けた。心血を注いだ民法典が流産の憂き目にあうのを見て失意のうちに帰国。1910年死去。



アッペール



ルヴィーヨ



フーク



ヴェルドラン

(1850-1934)

(1859-1927)

(1843-1906)

( ? - ? )



